

「んっ…はむっ…んっ…」

私が彼女の舌を絡め取ろうとすれば、彼女の舌も私に絡みついてくる。

私が彼女の頭を抱き寄せれば、彼女も私の頭を抱いて、唇同士が一層厚く重なり合う。

私達の間で、行き場を失った胸同士が押し合い、歪んで、溶けるような熱を帯びている。

「はぁっ…んちゅっ…ちゅっ…んっ…ぁっ…はっ…」

どれだけ重ねていたか分からない唇を離すと、互いの唾液で橋が架かった。

胸の高鳴りも、体のうずきも、もう後戻りできないところまで来ていた。

「…自分とキスするの、そんなに気持ち良い？」

「…貴女こそ、ずいぶん興奮してるみたいよ？」

目の前にあるのは、いつも鏡で見慣れた顔。その頬に貼り付いた、長く流れるような黒髪をそつと指先で払ってあげると、当然のように、彼女も私の頬から髪を払ってくれる。

「興奮してるのはどっち？さっきから、固いのが当たってるけれど？」

「こんなに固くしている貴女に言われたくはないわ」

「んっ…はあっ…んんっ…」はあっ…んんっ…んんっ」

私が、彼女の体に腕を回せば、彼女も私の体を抱きしめてくる。さらに押し付け合わされた胸が形を変える。時折乳首同士が擦れ合って、腰が落ちるような快感が走った。

「はあっ…んっ…私がこんな変態だなんて、思ってもみなかったわ」

「んっ…はあっ…私も、私がこんなに淫乱だったなんて、想像もしていなかったわ」

そう言い合って、私は目の前の私と再び唇を重ねる。

「はむっ…んちゅっ…んんっ…はあっ…」

再び重なった唇の中で、私は私と舌を絡ませ合う。

非現実的で背德的な、そして甘美で淫靡なこの行為に、私はただただ、没頭していた。

昼間私は、最寄り駅前の商店街で、見慣れない雑貨屋を見つけて、何かに誘われるように立ち寄った。他の客が見当たらない店内には、お香が立ち込め、

どこのものとも知れない民族雑貨が無数に置かれていた。

カウンターの内側にいた、妙に色気のある店主が私を呼び止めて、頼んでもいないのに、小さな何かを出してきた。それは、銀細工のブローチのようなもので、真ん中に不思議な色をした石がはまっている見たことのない「なにか」。

でも、私はその石に魅入られたように、気が付けばその「なにか」を5000円で購入し、足早に帰宅していた。

着替えも済ませないままに、小さな紙袋を開いた私は、一緒に入っていた説明書を読んで、秘めた欲情が滾るのを抑えきれなかった。

く分け身の鏡守く

・このお守りは、分け身の鏡守です。鏡に貼り付け自分の身を映すと、身分け

することができます。

- ・石が付いている方が正面、台座側が裏面になります。

- ・正面に向けて鏡に貼り付けると分け身、裏面に向けて貼り付けると分け身を解除することができます。

- ・周囲に人がいない場所でご利用ください（鏡に映った人物すべてを無条件で分け身にする効力があります）。

- ・分け身の状態でいずれかのご自身がケガや病気になった場合、解除してもその状態は継続します。分け身状態で両者がケガや病気になった場合には、解除後はいずれの状態も継続されますので、解除される際にはご注意ください。

- ・合わせ鏡に貼り付けると最悪の場合、死亡する恐れがあるのでおやめくださ

い。

そう、つまり、その小さなお守りは、身を分ける…私を増やすことのできるものだった。

そして私は、胸の高鳴りを抑えきれずに、すぐさまそれを鏡へと貼り付けていた。

パツと目の前が明るくなった次の瞬間、目の前にいたのは、鏡で毎日見かける女性。長い黒髪に、紅潮した頬をした顔。適度に張りのある胸に、引き締まった身体と、長く伸びた腕と脚。夢でも幻でもなく、これまで何度となく劣情を抱いた、もう一人の私…私自身だった。

そして、それから今に至るまでには、そう長い時間は必要なかった。

「こんなに濡れてるわよ…？」

彼女がその細い指を私の秘所に這わせて、耳元で囁く。

「貴女こそ、こんなに濡らして…もう入れてほしいの？」

私も彼女に囁いて、彼女の秘所に指を這わせる。

私達の秘所はもうすっかりほぐれていて、少し力を咥えるだけでも、指先がヌルツと中へ入りこんでいく。

クチュクチュツ

「んっ！」

私は、駆けあがってくる快感に思わずそう呻いて、彼女の体にしがみつき、その肩に歯を立てていた。同時に彼女も私を抱き寄せて、私の肩に歯を立てる。

快感に体が震えれば、それによって体が強張って、私と彼女の白い肌に、彼女と私の歯が食い込む。もう、それすら、この行為の喜びだった。

「欲しいんでしょ、ここに？」クチュクチュ

「貴女こそ、ここに入れて欲しいんでしょ？」クチュクチュ

私達は肩から口を離し、額を押し付け合って、囁き合う。

「欲しいって言ったら、入れてあげるわよ？」クチュクチュ

「貴女が欲しいんでしょ？こんなに濡らしちゃって…ほら、欲しいって言いなさい？」クチュクチュ

指先を出し入れして、私は目の前の私を責め立てる。でも、当然彼女も私を責め立てて来る。秘所の入り口を何度も叩かれ、そのせいで、腹の奥がムズムズ



とうずいてしまっている。

意地の張り合いは、不易だろう。私は、彼女の前髪を空いてるほうの手でつかんだ。目の前の私の顔が、このあとどうゆがむのか、それを見届けたかったからだ。でも、私と思考も同じ目の前の私も、前髪をつかんできて、お互いに見つめ合う状況になる。これで良い…こんなことで、差がついてしまうような相手では、面白くない。

私は、彼女の中に人差し指を突き込んだ。同時に、私の中にも彼女の指が押し入ってきた。

「あっ！んっ…んんっ…んんんっ！」

「はあっ…はあっ…はあっ…」

「どう？ 気持ち良いんでしょ？」

「真似しなくてももらえる？ 気持ちいいのは、貴女でしょ？！」

さらに私が秘所に二本目の指を差し入れれば、彼女も私の中に二本目の指を差し入れて来る。

二本の指で彼女の膣内（なか）の最もザラつく部分、私が一番好きな個所を指の腹で一気に擦りあげた。

「これで、どうっ…んっあぁっ…はぁっ…あっ…あぁっ…んんんっ」

同時に彼女の指も私のスポットに擦り付けられてしまう。

弱点同士の責め合いは、そう長くは続かない。

「き、気持ち良いって、認めなさいよ…はっ…くっ…ううんっ」

「認めるのは、貴女の方よ…あぁっ…うんっ…んんっ」

「ほ、ほら、はぁっ…んんっ…イ、イキそうなんでしょ？」

「ぜ、全んっ然…貴女は…はぁっ…もうイキさそうみた、い、だけれど？」

「わっ、私のクセに、んんっ…淫乱女なんだから…あぁっ…早く…イキなさ

い…んんっ！」

「貴女こそ、先にイキなさ…あぁっ…いよ、この淫乱女…はぁっ…あっ…んんっ！」

彼女の指はしっかりと私の膣内（なか）に差し込まれ、確実に私のスポットを擦り続ける。私も負けじと、彼女の膣内（なか）の彼女の弱点を責め続けた。

「は、早く、イキなっ…はぁっ…さい、よぉっ！」クチュクチュ

「貴女が、イキなさいっんっ…ああっ…んん！」クチュクチュ

「あっ、んんっ、くっ…はあっ…んんんっ！」「くっ…はあっ…あっんんんっ！」  
クチュクチュ

「「あっ…あっ…ダメ…んんんっ…イクっ！…イっ…クウ…！！！」」

子宮の中が収縮し、ビクンビクンと痙攣を始める。その快感に私はこらえきれず、彼女の体にしがみついていた。彼女もまた、同じように体を脈打たせ、私にしがみついていた。

私達は、抱き合い、互いの膣内（なか）に指を差し入れたまま、体を震わせ、その波が収まるのをじっと待っていた。

ほどなくして、私達はどちらからともなく、体を離す。

今まで抱き合っていて見えなかったが、もう一人の私の目は、まだ枯れてない。  
いい。そう、私が求めていたのはこんなものではない。

私は、もっと激しくもっと強烈に

以下分岐

- ①「私自身と交わりたかった」
- ②「私自身との喰い合いを望んでいた」
- ③「一方的に汚してしまいたかった」